

真剣で弟と認めなさい！？

黒瀧汕

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界にその名を轟かせる九鬼財閥。

「帝」の主導のもと、日々成長する九鬼だがその影には大きな傷痕が刻まれていた。

一度のテロで全てが変わった。

あれから10年の歳月が過ぎようとしている所にそれは川神の地に現れた……。

目次

第十五話	51
第十四話	48
第十三話	44
第十二話	39
第十一話	36
第十話	32
第九話	30
第八話	27
第七話	24
第六話	21
第五話	15
第四話	12
第三話	7
第二話	4
第一話	1

第一話

かつて、九鬼家長男には双子の弟が居た、名は「九鬼傑將」くきまさかつ。

兄の英雄に比べ豪胆さは無かったが、冷静で大人顔負けの落ち着きが備わる神童であった。活発な兄と冷静な弟。正反対な二人でも、姉弟の中でもとても仲が良かった。

しかし、アメリカのテロによりその仲は引き裂かれた。

『う……ぶじか、まさかつ』

『う、ん。なんとか』

此度出席したアメリカのパーティー、それは綿密に計画されたテロにより阿鼻叫喚の地獄へと化していた。

『はしれ、ここをぬければきつとたすかるぞ！』

『はあ、はあ、わかった！』

黒煙と焦げ焼けた臭いが充満する廊下を二人は駆けていた。幼いながらも冷静に地上へ繋がる道筋を見極め、物をどかしては飛び越え走り続けた。

出口はすぐそこ、助かる希望が見え駆ける足にも力がこもる。しかし、二人に迫るのは希望だけでは無かった。

最低限の稽古しかこなしていない弟の傑將は兄の英雄に比べ走りに差が出来てしまう。そんな些細な所が二人の未来を大きく変えた。

突如、兄の英雄の居る床が崩れ落ちたのだ。だが英雄は野球で鍛えられた瞬発力で辛うじて穴に落ちることは無かった。しかし、傑將は目の前に出来た床崩れに反応する事が出来ず滑り落ちてゆく。

『まさかつ!!』

『うわああ!!』

英雄は今落ちる弟に手を伸ばし、その腕を掴まえることが出来たものの子供の体重といえど腕に掛かる負担は相当なものだった。

『うぐう!!』

『ひびお!!』

掴んだ右腕にかかった重さは関節を痛め、英雄の肩は焼けるような痛みが走る。

『まってるまさかつ、いま、あげてやるからな』

『むりだよひでお、ぼくはいいからひでおだけでも』

『おとうとおきざりにするあにがいるかばかものお!!』

降りかかる火の粉もコンクリートの破片も物とはせず英雄は最愛の家族を救おうと奮闘する。

『おまえがいなければだれがいつしよにボールをなげあう、だれがいつしよにベンキようする、だれがいつしよにけいこをがんばる!!』
『あねうえも、ちちうえも、ははうえだっておまえがいないとぜったい
にかなしむ。そしてなによりおまえがいないとわれはいやなのだ!』
家族を守る。涙流しながら力強く訴える兄の姿に傑將も生きる為
の覚悟を固めた。

『ひでお……あつ!!』

今も引き上げようとする英雄の頭上から子供の頭くらいのコンクリートの塊が落下してきた。当然英雄はこれに反応する事が出来ず飛来してきた塊は英雄の伸びきっている腕に直撃した。

『あ”あ”あ”あ!!』

とてつもない激痛が英雄を襲う。しかし、英雄はその手に握る命だけは離さなかった。

『ひでお!!』

『あ、わ…てるな、こん、なの…どうつ、てこと……』

『ひでお……もう、やるしかない』

意を決した傑將は下を見る、暗く全てを飲み込んでしまいそうな穴は幼い傑將にとてつもない恐怖を煽る。

(だけど、そんなもの!!)

目の前で痛みに苦しむ家族を眺めるより遥かにマシであった。

『ひでお、もういいよ』

『な、にを……まさか』

『もうだいじょうぶだから。あとはぼくががんばるよ』

『やめ、ばかな、ことは』

兄の言葉を最後まで聞くことなく傑將は英雄の手を振り払った。

『またすぐにあうよ、ひでお』

『まさかっとうとうとうとうとうっ!!!』

英雄は血に塗れた手を伸ばす。しかし、暗い闇の中に落ちてゆく最愛の家族には届かなかった。

※ ※ ※

「っはあ!!」

飛び跳ねる様にベッドから起床した九鬼英雄、飛び起きる際伸びた右手はどこに向かうでもなくただ空を切つて固まっていた。

「また、あの夢か……ここまで尾を引くとは我ながら軟弱なものよ」
思わず握りしめる右手。それはかつて弟たる傑將を救う事も出来ず、夢であったプロ野球選手の道を閉ざした。夢も弟も取りこぼした右腕を英雄はいつそ切り落とすことすら考えたこともあった。

「過ぎてしまった事は仕方ないか……確かに引き摺ったままでは民に示しがつかぬわ」

気持ちを切り替え英雄は起き上がり時計に目をやる。

「ふむ。少し早めに起きてしまったか」

時刻は早朝午前4時15分。九鬼の執事やメイド達ならば起きる時間帯である。

「ならば、湯浴みをした後気分転換に散歩するも良かろう。フハハ、そうと決まれば早速行動せねば」

普段通りのテンションに持ち上げ英雄は今日を過ごす。その裏で自らを傷つけ怒り狂う激情に蓋をしなから。

第二話

イタリア

薄暗くポツポツと陽の光が入る殺風景な部屋。そんな部屋にイヤホンを耳にかけた男と片手に煙草とウイスキーを揺らし遊ぶ男がいた。

「今回の依頼内容は陽動。しかも相手は軍人か……んなもん出来るのか？」

煙草の煙を吐くと男は気だるげに呟きイヤホンかけてる男に尋ねた。男はイヤホンから聞こえる音を拾い片手ではメモを、空いてる手ではキーボード叩きながら男の言葉に答える。

「……表側は警備会社だけど、ココは殺しや薬でなければ何でもありだからな。幸い旅費とか装備はあっちもちだし、結果次第ではなんとかなるかも、な」

カタンツとキーボードを強く叩いたあと、パソコンの画面から張り出された結果に男は苦い表情を浮かべた。

「……やはり、裏があつたか」

街中に仕掛けてある盗聴器の一つから話を盗み聞きし調べあげたものが予想通りとなつた今、民間警備会社『アーバレスト』のリーダー『シルバークロス』は溜息を零す。昨日、このアーバレストにある仕事アーバレストが舞い込んだ。依頼主はとある会社の技術者らしく新開発した戦闘機を試したいらしい。そこで試験の妨害となりうる奴らの一端を俺らで食い止めろというのが今回の依頼だ。勿論リスクは高い上に失敗すれば後がない依頼だが、現在アーバレストは代替わりしてから会社運営が芳しく無く報酬が高いため引き受けざるを得なかった。

「今回話持ちかけた奴ら、多分俺らと同じ使い捨てだろうからあまり詮索しても意味は無いが、一応ほかの同業者には連絡とって警戒しとけばいいだろう……それよりも」

シルバークロスが部屋の片隅に設置してるプリンターに目を移すと、丁度動き出したプリンターは数枚紙を吐き出し止まる。紙を取り内容を確認するとその顔からは生気が薄れていき暗い表情が張り付

く。リーダーの暗い雰囲気を感じたのか半ば飲まれていた男もシルバークロスが手にしている資料を読み「うげっ」と苦しい声を挙げた。

『『猟犬』か……ドイツの将校が管理・保有している特殊部隊、その任務達成率はほぼ確定もの。こいつはハードな内容だな』

狙われたら最後、狩り尽くされるまで終わらないとヨーロッパ圏では有名な特殊部隊の名前が『猟犬』である。その部隊に所属しているのは全て女性であり、特異な才能を秘めた者達が多く在籍し、上手く能力を使い分け国からも高く評価されている。もし、こんな人間達を相手にしたら大体の相手はただでは済まないだろう。

「だけど、今回の仕事はあくまで陽動だ。つまり、遠くから銃口向けただけでいいんだから楽だろ？」

本当はそれだけで済まないのだがシルバークロスは口にしかけた言葉を飲み込む。男の方も「そりやそうか」とあまり気負わぬよう思考を切り替え残りの酒を傾けた。

※ ※ ※

「つつつても、久方の仕事はこれじゃ……難儀なもんだな」

一つ上のロビーから更に下にあるアーバレストの社長室。薄暗く机の上にある電灯一つで照らされる資料には依頼の標的であるドイツ軍猟犬部隊の資料が広げられていた。その中で一番上に置かれている赤い髪の眼帯女性、シルバークロスは彼女の資料を何度も読み返した。彼女は今ドイツ軍の将校であるフリードリヒの腹心であり私兵でもあった。そして最近フリードリヒ家のご令嬢が日本に留学と言うことで彼女の護衛として任務以外日本に居るらしい。

「日本か……うっ」

脳裏に過ぎる幾つもの光景が針のような痛さと共に想起する。映し出される数々はどれも日本の光景だった。見慣れない文字、群れるビル、立派な建物と多くの付き人、暗い世界で血塗れな手を伸ばす子供。

「つたく、毎度何だこれ」

一通り光景が流れ終わると全身を酷い倦怠感が襲う。酷く歪む視界、頭の奥からじつとりと来る痛みにならつきながら手探りで備え付

けたソファに倒れ込んだ。

「はあ、何だって日本なん、だか……。」

一人の眩きは誰に聞かれることなくシルバークロスはそのままソファに身を埋めた。

第三話

ゴールデンウィーク

それは祝日が重なり土・日曜日、長期休暇期間とは別に休みが与えられる連続休暇期間である。社会に身を置く者にとつてはあまり影響ない期間だが、その連休を大いに喜ぶ者達がいた。

「よーし、いっくぜえー!!」

「キャップ、折角だし大物期待してるよ」

「任せろ、今にも川の主とか釣り上げてやるからな!!」

赤い龍の模様のバンダナを巻いた自由奔放な少年「風間 翔一」の他、賑やかな少年少女の声が山に木霊する。大自然の威厳と神秘が溢れた場所、川神が誇る修行場の一つ「川神山」。その麓にある川の位置に、とある一団が賑やかに遊んでいた。

「こちらも負けられないな」

「フッフ、それじゃあこつちも勝負よ!!」

「良いだろう、受けて立つぞ!!」

「その前に、餌付けをまゆつちに頼るんじゃないで自分で付けられるようになろうやクリ吉」

「うっ、だ、だって、うねうねとして気持ち悪いんだもん」

「クリ、自分でやらないと意味無いわよく?」

「ぬぐぐ」

悔しそうに呻く金髪のドイツ少女「クリスティアーネ・フリードリヒ」は改めて釣り餌を見て顔を歪めた。それを慣れたのか黒髪の大和撫子「黛 由紀江」は平気で針につけると釣りを続ける。

「うゝむ。これ、釣りじゃなくて素潜りじゃ駄目なのかしら?」

「二応、ここの川は少し深めだけど止めてよね」

赤みがかった茶髪の活発少女「川神 一子」は釣り糸を垂らしながらうずうすと水面を眺めるが、その実行しかねない様子に懸念した線の細い内気な少年「師岡 卓代」は釘を刺した。

「間違っても飛び込むじゃねえぞワン子。下手して釣り針がそつち行ったら怪我するからな」

「わかってるわよ。でも、目の前で餌垂らしてるのに食いつかれな
いのは何か悔しいわ」

「わかるぜ。俺も常に餌を垂らしてるのに向こうからは来る気配す
らねえ、やっぱりお姉様方に映る俺の肉体美は刺激が過ぎたか。罪な
男だぜ、俺様ってやつは」

自分の肉体を誇張し上腕を掲げる大男「島津 岳人」は自慢の筋肉
を見せびらかし皆の反応を横目で伺うが、岳人の期待に反し辺り一帯
は静まり川のせせらぎが虚しく響く。

「ガクトって国語の成績どのくらいだっけ？」

「確か以前のテストは最下位からいくつかだった筈」

「なら仕方ないね」

「自分の名前も間違うレベルだし無理もないさ」

「そこ、もう過ぎたことぶり返すんじゃねえ!!」

後ろから毒の籠った言葉を突き刺さす2人。のんびりと寛ぎ竿を
石で固定するように組み立ててるやや童顔の少年「直江 大和」とす
ぐ側にくつついてる無表情な少女「椎名 京」。ぴつたりと傍に寄り
添い仲睦まじい2人だが、実際には京の方が大和に寄っている構図で
ある。

「おゝい、まだ釣れないのか〜？」

間延びする声で釣りをする少年達にかける人物。発育の行き届い
た身体に黒い前髪を交差させる美女、川神が誇る武人の一人「川神
百代」は少年達と少し離れた位置から退屈そうに胡座していた。

「だったら姉さんも釣り参加してよ。どうせ暇なんですよ？」

大和はそんな胡座かいてる百代に釣りの催促をするも「やだ、今日
は気分じゃない」と拒否をする。百代の反応に大和は「やれやれ」と
苦笑する。すると大和の竦めた反応が気に入らなかったのか、百代は
座っていた場所から姿を消し大和の後ろに現れ抱きついた。

「ちよ、姉さん」

「何だ、さっきの反応は？ お姉さん、ちよ〜つとムカついちゃった
から弟を弄ることにした」

「わ、うわ、ちよつと、シャツの下から手を入れられないで!!」

突然背中から密着された上、こそばゆい撫で方で刺激され大和は悲鳴を上げそうになる。しかし、反応を我慢し耐える大和の姿に百代は楽しくなり責める手がエスカレートしてゆく。どんどん苛烈になつていく百代の責めに大和は己の対応の失敗を悟り適わないと理解しつつ、現状打破の知恵を模索した。

「モモ先輩!!」

「どうした京?」

すると京が声を張り上げ百代の楽しみを止めた。丁度乗ってきた舎弟弄りを止められ、百代はやや加虐者の顔で京に止めた理由を聞く。京はごく自然な動作で大和の右側に座り直すと大和の腕を抱き寄せた。

「右半分私が責めるからモモ先輩には左から責めて欲しい」

「ちよつと、京さん!」

絡んで来る手が2倍と自分の事を隅々まで観察、ストーカーしてきた京による的確な責めにより堪えてきた喘ぎにも似た声が解放された。この時大和の周辺は現状釣り上げた魚の処理をし始めてスルーしていた。こうして大和はまた一つ、男としての何かを失った。

※ ※ ※

川神にはある有名な学校がある。武を尊び、お互い切磋琢磨する為常に競い合う学舎「川神学園」。そこはまさに文武両道を体現させるために特殊なコースや規則が組み込まれていた。故に他県からわざわざ川神学園を選ぶ者も少なくない。そんな者達の為に川神学園はいくつかの地主達へ協力を頼んだ。直江大和や椎名京達が暮らす「島津寮」もその一つだった。その島津寮の一室で直江大和はモンスターの前で力尽きた狩猟人のように倒れ伏せていた。

「あー、疲れたー」

それもこれも原因の殆どは昼のくすぐりにやるものだった。が学生生活としてはこの上なく満喫してる日常だ。身体全体に乗りかかる疲労に瞼が重くなり、意識を落とす直前に大和の携帯からメロディが流れる。眠る直前にかかる携帯の音楽に大和はのろのろと手を伸ばし、通話のボタンを押す。

「もしもし」

「もしもし、私だ。声に覇気がないな、疲れているなら明日に掛け直した方が良かったか？」

電話の相手は予想外な人物であった。現在ヨーロッパでファンドマネージャーとして活躍中で大和の実の父親である「直江 景清」。その慧眼は金融危機を逆手に好成绩を弾き出す程の腕を持っている。

「あれ、父さん？ ううん、ちよつと疲れてただけだから問題ないよ」

「そうか、あまり無茶はするなよ。母さんだつてお前に何かあつたら心配するからな、勿論私もだが」

「気をつけるよ」

淡々とした会話であるがこれでも親子の家族愛は他より強いものであつた。その後も軽く雑談を交え、大和は親の電話をかけてきた本題を思い出す。

「そういえば、この一昨日話したのにどうしてこんな早く電話を？何かあつたからかけてきたんだよね」

緊急の内容であれば真つ先に伝えてる筈だ。それがないということとは何かの知らせか予定でも話すのだろうかと考えた。

「ああ、そうだ。実はな、私の知り合いが近頃日本に行くそうだ。これを機にお前と顔を会わせてやろうかと思つてな」

「へー。父さんがそこまで言うつてことは、大物？」

「いや、名前はあまり売れてないが腕は確かだ。そこらの傭兵や諜報員より役に立つ」

返つてくる仕事基準がどこも物騒極まりない所にまだ会つてないその人物の性格を予想し大和は嫌な予感を覚えた。

「それに大和とも同年代らしいからな、今の内に知り合つても良いだろう。私の仕事を手伝わせ働きぶりを間近で見たが、あれは敵に回さん方がいいな」

「同い年なのにそこまで出来るのか……。」

実際大和の身近にも人外的なことする奴もいるが、実の父から語られるその評価に大和は顔も知らないその同い年に対して無意識に嫉

妬し口元が尖ってゆく。

「本人も日系人だから水は合うだろう。折角だ、川神を案内でもして交流を深めるといい」

「……わかった。来る日が決まったら連絡お願いね」

「ああ、聞き次第また連絡する」ピッ

通話を終えた大和は、携帯をそのまま手放すことなく電話帳欄の人物に電話をかける。その作業は時計の針が真上に重なる時間まで続いた。

第四話

日本　　く川崎市く

「さて。いざ日本に着いてみたが……イメージ通りだな」

日本に来て早々シルバークロスの日本への評価はその一言であった。信頼を得る為に固めに固めた警備と法律、一つの事に詰め込んだ手の込みようと法の檻に囲まれ何が来ても撃たれない、怪我しないと慢心しきり甘い思考に毒された動物。日本人 そんな生物が横を何人も通り過ぎる様をシルバークロスは見下すような視線で流す。しかし、いざ川崎市に一步踏み出すとその偏見は改変せざるをえなくなった。

「川神流『無双正拳突き』!!」

土地の下見に兼ね情報収集をしに訪れると橋の下で人集りができ賑やかだった。さり気なく人から話を聞くには丁度いいと人集りに近付いた途端、人が吹き飛ぶ現場に居合わせてしまった。

「日本だと人が飛ぶのかよ……。」

シルバークロスは星となった日本人であろう男性を飛ばした元を見る。そこには艶のある長い黒髪のこれまた美形な少女がいた。

(あれが噂の《MOMOMOYO》か)

《MOMOMOYO》各国の代表者から警戒され核と同様の危険視された個人だ。同じく警戒されている『鉄心』は穏やかで武を尊ぶ人格者と聞く。しかし、百代は違う。生まれ持った力の強大さから有り余った力を弄び発散させたがる節があるという。故に百代は様々な国から一目置かれていた。

(核爆弾を野に放っている様なものなのに、やはり、日本人の考えはわからん)

しばらく遠目に眺めるとある違和感を感じ静かに身構える。背後には誰も居るわけでなく警戒してもやはり違和感を拭うことは出来なかった。

「(見られてる)……ちっ」

偶々かもしれない一抹の祈りも無為となり周囲から感じる視線は外れる事無く捉えられたままだった。とりあえず相手の実力を測る

為に一般人を装いその場を離れた。念のためにあらかじめ用意していた暗号文メールで集合場所を指定しそこに向かうが、街の中に紛れても視線は消えなかった。

(2、3 回人混みに紛れて尚、尾行されるか。ここまで来て相手の顔も見えず付けられてるとなると俺は相当な奴に目を付けられたな……。)

念のために入国直後買った帽子の隙間から尾行者を数回硝子やミラーで覗いても見つけることは出来ず、更に歩き親不孝通りの路地裏で足を止めた。

「……そろそろお伺いしても良いですかね？」

今度こそ人の気配を感じ振り返り自分を尾行した人物に視線を送る。

「おやおや。こんな状況下でそんな質問とは、そこまで頭の悪い人物とは思いませんでしたよ『アーバレスト』の『シルバークロス』」

そこにいたのは軍服を着た赤髪眼帯の女性であった。

”Oh, ^あle ^最pire”^だ」

シルバークロスは今日という日を人生で一番悲嘆した。そして、理解もした。今、シルバークロス達は不慣れな日本の土地、標的情報を集めてこちら側から仕掛ける予定であったが、標的側はその準備期間の内にこちらへ仕掛けてきたのだ。

(ここまでの手際、恐らく九鬼が関与してる。ってことは、他も同じ状況だろう……。)

先程から来ない仲間達の連絡、それは彼が出した指示から10分も経過するうちに何人かが捕えられたまたは今も戦闘になっているだろう。

「さあ、無駄な抵抗はやめて投降しなさい。今ならまだ尋問で済ませてあげましょう」

腰に備えていたトンファアを抜き対峙するこの女性こそ、優秀な女性のみで構成されるドイツの特殊部隊を率いる若き隊長「マルギツテ・エーベルバッハ」本人である。普通に闘えばいくら裏手前で活躍する実力派なアーバレストであっても負けは見えていた。頭の中で

この場面を脱する手段を何通りも講じようが全てにおいて相手が上だった。焦りを顔に出さないよう徹底し、経験と知識を総動員させる。すると先程まで見ていたものを思い出す。張り付けた口角を更に深め一か八かの賭けにシルバークロスは身を乗り出した。

「Aspettia^待mon^てこは川神だ。この地特有の交渉方法があると聞く、ならばその方法で全てにケリを着けては如何でしょう？」
予想外の提案だったのかマルギツテの警戒する眼差しに内側を探るようなものも含まれた。

「もし、こちらが勝てたら俺を含めメンバーを見逃してくれ、当然貴方達には手を出さない。逆に負けた場合、俺の首をやるよ」

「ほお、自分の首に大した自信を持っていますね」

「そもそも奴らを引つ張ってる立場の奴ですし、自分自身使い道ある人間である自覚はありますからね」

疑いの眼差しが未だに残るマルギツテにシルバークロスは挑発の言葉を畳み掛け煽った。実力が離れていたとしても相手は自分を格下だと見下している状況につけ込んだのだ。

「……いいでしょう。その自信が驕りであることを理解しなさい」

第五話

「日本に向かう不穏な組織あり直ちに処理せよ」

ドイツが誇る情報網が捉えた一報。普段なら日本に滞在する猟犬達で事に当たるのだが、私は敢えて精鋭の者達を呼んだ。何故こうしたのかは根拠は無い。しかし、私を感じた予感は的中した。初めは機器の故障かと思った。作戦開始から数十分、彼女達の定時報告からまだ討ち取った知らせが来なかつたのだ。どうやら、敵は攻撃的な行動をせず、逃げる・回避する動き徹底され、その動きにこちらが乱されている状況らしい。リザからは何回か捕縛報告は上がってるがそれでも全体からすれば微々たる結果だ。事前に軍から送られた資料を見たところ、名も売れてない依頼の内容もそこらの樹木のような働きしかししない弱小組織の筈だった。しかし、私も目標の者を監視して理解した。あの少年は強い。対峙して目を見て改めて思った。鍛錬を積むような人間ではないにしても生まれながら、育ちながらの環境がそうさせたのかは判断し難いがそこらの武道家より強いだろう。ここに来て公私混同させるつもりは無いが私の血はこの時熱を持った。この間止められた川神との死合い、あの時滾らせた猟犬の牙が再び疼く。

※ ※ ※

「今回の立会いはあたいが担当するぜ猟犬、審査はあくまで公平に行う。邪魔はうちらがさせねえから安心しな」

二人の間にメイド服を着た女性が場を整えた。二人は先程ギャラリー賑わっていた河原の近くである橋の下で対峙していた。既に人集りは霧散しその場にいるのはマルギツテとシルバークロス、そして決闘の審判役を務める九鬼家従者第一位である「忍足あずみ」である。一見、逃げに徹してしまえばそのまま逃亡出来そうな状態だが、周囲1kmに他の従者が配置されそれは叶わないこととなった。

(民間警備会社「アーバレスト」の『シルバークロス』、見た目と九鬼から何も情報があがらない所からとすればそこらのと大差ないガキなんだが……。)

あずみはちらりとマルギツテに対峙してる男を観察する。帽子で顔の殆どは隠されてるが顔立ちが整っているのは確かだった。格好もジャケットにズボン、ジャラジャラとした銀アクセサリーを身に付けており、そこら辺の若者と大差ない。強いて言うならばチャラついていた。しかし、あずみは彼の身につけてる物に目をつけた。あずみや李辺りでなければ見抜けない暗器が幾つか仕込まれていたのだ。

(こいつは訂正だ。もし、猟犬がやられた場合を想定して手配しなければならんな)
あずみの中で男の危険度が上がり警戒対象としてリストアップされる。

「好きにきなさい、私はいつでもいいですよ」

「これは緊張するなあ…。(まさか九鬼が来るとは思わなかったが、何もしなければ大丈夫だろう)」

お互い後少しで間合いの距離で対峙し幾通りのシユミレーションを組み立てる。するとマルギツテは構えを解きシルバークロスに向かって口を開く。

「せっかくですから先手を許します。掛かって来なさい」

「では、遠慮なく」

シルバークロスは足元に転がっていた小石をわざわざ屈んで手に取ると、立ち上がる途中指で弾く。

「ふっ」

目を狙った奇襲は難なく弾くマルギツテだが、視線を戻した時既に間合いの距離にシルバークロスは居た。

「(思った以上に早い!!) トンファーキック!!」

「よっ」と

迫る蹴りを紙一重に躲すと同時にシルバークロスも蹴りを放った。

「ふん、こんな……っ!?!」

マルギツテはバックステップで蹴りを避けると腕に痛みが走る。痛む場所を見るとそこには一筋の切り傷が生まれていた。

(今のは完全に避けた筈なのにこれは一体……。)

マルギツテはシルバークロスの足を見て理解する。

「ちっ、仕込み靴か!!」

シルバークロスの靴から3cm程の鋭利な仕込みナイフが伸びていた。先程わざと目の前で石を拾ったのは不意打ちだけではなく、靴に仕込んでいたナイフを出しやすくする細工を施すためでもあったのだ。

「ふっ!!」

そこからマルギツテは足技とナイフの攻撃を弾く合間にトンファーを振り込んだ。苛烈になるマルギツテの攻めには短期決戦の意が込められていた。

(下見、立ち振る舞い、予め仕込まれた暗器からしてこの少年は慎重な人物なのだろう。先程のナイフに毒を仕込んでいた可能性が高い。ならば、攻めは最初から全力で!!)

様々な技と経験のやり取りが数分続き、激しき増す闘いと共に刻一刻と戦況が傾き始めた。如何に裏仕事を実力で捌き生きてきた人間であろうとも、日々苛烈を極める戦いをくぐり抜けた百戦錬磨の手練であるマルギツテには届かなかった。傾き始めた状況にシルバークロスはマルギツテとの距離を離すが、相手はその隙を見逃すことはなく肉薄し追い込む。

「くっ」

「これで終わりです!!」

僅かにバランスを崩した瞬間に最高のタイミングから放たれるトドメの一撃を刺そうとした刹那、猟犬の勘がその手を止めた。次の瞬間にその勘が正しい事が証明される。

「……まさか、あの場面で手を止めるとは思いませんでしたよ」

微かに声音から動揺を含ませ語るシルバークロスの右手には今まで意識してなかった腰のウオレットチェーンが握られていた。もしもマルギツテの手がそのまま出していたら今頃チェーンに絡まれ腕を捻れ切られていたかもしれない。そう考えたると男を改めて手練であると再認識せざる得なかった。

「これを初見で見破った人は貴方が初めてですよ猟犬」

「……大層な事を言いますね。しかし、それは初めて見た者にしか

通用しませんよシルバークロス。露見してからは無意味だと知りなさい！」

再び肉薄するマルギツテだがシルバークロスは張り付いた笑みを崩さない。瞬間、マルギツテの左死角から高速でチェーンが絡みに迫る。

「なっ、くう!!」

予想外な技のキレにマルギツテは舌を巻く。眼帯で視界が狭まれていることもあつてか、幾ら注意深く観察し弾いても本命となる攻撃には届かず逆に攻め立てられる。何度目かの攻防を重ねるとマルギツテは距離を大きくとり、構えを解いた。

「なるほど、確かに実力は身に付いているようですね。いいでしょう、貴方に敬意を表して全力で相手します。」

するとマルギツテは自身の眼帯を引きちぎると陰に隠れていたルビーの瞳が開かれる。シルバークロスはマルギツテの雰囲気の変貌に警戒、チェーンを一本の棒状に組み立て臨戦態勢になる。次の瞬間、腹部から強烈な痛みを感じた。

「ぐっお!!」

肋骨の軋みと胃液がごぼりと反転する音を感じながら後ろに僅かでも衝撃を流し派手に転がった。

「がはっ、ぐお、ごっほっ」

吐き出す衝動を堪えながら視線は敵を睨みつけ現状理解した情報を整理する。マルギツテは先程シルバークロスがいた場から動かずただ黙ってこちらを見つめていた。

「立て、闘え。最後まで足掻いて見せなさい」

「は、はは、無茶言ってください……よっ!!!」

よろめきながら立ち上がると次にシルバークロスが攻勢に出た。緩急とフェイントを織り交ぜ、時折体術や再び棒を解きチェーンによる波状を放つ。しかし、双眸を揃えたマルギツテには攻撃の半分は避け半分はいなしダメージを弱らせていた。着実に封じられる攻撃に焦るとチェーンを組み立て、棒による渾身の一撃で仕留める構えになる。それをマルギツテは構え迎え撃つ姿勢をとる。

勝負は一瞬、全身の力を使ってた放つ上段からの叩き込みはマルギツテの堅牢なトンファーにより守られ、がら空きとなる腹部に強烈な連打からの全身攻撃を食らわせられる。猛烈な攻撃にとうとう身体と精神が耐えきれなくなりシルバークロスの意識は途切れた。

※ ※ ※

「ふん。」

勝ち誇るでもなくマルギツテは気を失う男を見下した。

「(駆け引きや闘いのセンスと言ったものは文句無く良いものを持ってますが、思考の誘導や偽装、鍛練などはまだまだですね) ……ふふ」

マルギツテは今までの闘いを通しシルバークロスという人間を知りその中に潜む可能性に思わず口角が上がる。

(彼を育てればどこまで化かせられるか、それはそれで面白そうではありますね)

「おう、何だかご機嫌良いじゃねえか猟犬の。そんなにこいつが気に入ったのか」

「そうですね。闘ってみたところ、彼には可能性は大いに秘められています。それを自分が育て鍛え上げるのは大変面白そうです。」

(……こいつは面白いものを見たぜ)

普段男の話など気配すら感じられないマルギツテがまるで自分の弟を評価するような口調になっていたのだ。あずみは今後マルギツテをからかう材料としてその様子を眺めた。

「それではこの男は私が引き取ります」

「ああ、良いぜ。こちらも後の事は……」
ぱさっ

マルギツテが男を担ぐと今まで大部分が隠れていたシルバークロスの全貌が露わになる。

「……なん、だと」

「あずみ?」

驚愕に固まるあずみの反応にマルギツテは疑問を抱いた。

「なっ!？」

それにつられシルバークロスの顔を見てマルギツテも思わず硬直した。白銀の髪に女性寄りでやや幼気残る顔立ち、男女どちらが見ても見蕩れるであろうその美貌を濁らせる顔の傷と額に刻まれた十時傷。

「……猟犬、話が変わった。そいつは九鬼が引き取る」

さつきまでの碎けた雰囲気が一変しあずみの声に重みが乗る。マルギツテもあずみの雰囲気を感じ男を渡した。

「いいでしょう。ですが、もしものことがあったら今回の件について彼と話し合いさせて下さい」

「いいぜ、追々連絡する」

この事態の急変に川神の日常がまた一つ慌ただしい要素が加わった。

第六話

そこは、地獄だった。荒廃し空気すら焦がす大地に俺は居た。

空は見えず反響する低音の地鳴りがここを屋内と証明する。取り込む空気は火の粉が含まれてるかのように熱く喉を焦がしにきていた。顔を上げても見えるのは炎の輪郭。そんな狭まれた空間から俺は無駄だと理解しても逃げた。走り、躓き、這いながらもその場から遠ざかりたくて。

すると肩に何か触れた。ぬるりと粘着力のあるそれは生暖かく気持ちの悪い水音を奏でながら俺を掴む。それは力を込めながら俺をゆっくりと振り向かせた。

※ ※ ※

「あ”あ”あ”あ”あ!!”」

横になっていた姿勢から全力で飛び上がり身を低くし警戒態勢になる。

「フウーっ、フウーっ、フウーっ!!」

獣のような息を漏らし神経を研ぎらせ周囲の情報を取り込む。やがて、意識がはつきりとなり獣じみた呼吸を落ち着かせる。そして、改めてここが見慣れぬ場である事を理解すると最後の記憶を辿りながら情報を集めた。部屋の調度品からベットの品質を調べたがどれも統一されたメーカーから作られたものでその中でも最高級な部類の物であると確認、多少の違和感を抱きながら今度は自分の状態から推察する。

(さっき動いた時、感じた痛みからしてまだ体に罅が入ってるが、丁重に治療されてることからしてまだ利用価値がある者として生かされてるってことか……)

だが、それでもこの部屋の違和感が拭えない。いくら何でも丁重過ぎるのだ。いくら実績あつて優遇されてるとしてもだ、一介の軍人がこの様な全てが高級で設えてる場所に捕虜を連れてくるか？

(俺ならば否だ。ならば何が目的か……：そういえば俺は何故、先程飛び起きたのだろうか?)

まるで全身運動を全力で行ったかのような汗のかき具合に疑問が浮かぶ。

(イギリスにいた時のフラッシュバックはここまで酷くはなかった。ならば一体……)

部屋の中央で思い耽る所にドアのノック音が部屋に響いた。完全に思考の方へ意識を向けていたシルバークロスは数秒は慌て机の上にあったペーパーナイフを手に構える。しかし、ノックの相手はそのまま部屋に入ることなく様子を伺ってる様に感じた。すぐに落ち着き現状を確認する為の方法を幾通りもシミュレーションする。

「……どうぞぞ」

絞り出した声音はいつもより強ばっていたがちゃんと言葉として伝えられた。扉の向こうにいる人物は最小限の音だけをたて入室する。入ってきたのはやせ細り執事服を着込んだ老人である。軽くこちらの顔を見ると微笑み恭しく頭を下げた。その動作一つ一つは非常に洗礼されたもので、角度、距離、こちらに対する配慮まで全てが完成されていた。

「どうも、こうして会うのは初めてでございますね。私は九鬼家従者部隊のNo. 3クラウディオ・ネエロでございます」

「クラウディオ……まさか、『完璧人間』の……」

「その名前は買い被りでございます。今の私はここで働く執事です。それに、この体は既に老いており、ミスは防げても長く保てなくなりましたから」

そう語ると老執事は「ささ、お体が冷えるでしょう」とソファアに座らせると、どこから出したのかティーセットが準備され茶を淹れ始める。その様子を眺めると自然と惹き込まれた。バーテンダーや手品師は人に見られる為、手など意識してより美しく洗練された動きをお客に魅せる。この執事も同様、バーテンダーや手品師の様に人に魅せる動作でティーカップに淹れる事で紅茶への味の期待感が高まった。僅かに立ち上る湯気からして温度も調節されているのだろう、広がる香りとカップに触れた時の温度が適切ですぐにでも口を付けて飲みたい衝動に駆られた。一度警戒しごく少量、薬の有無が判断出来

る量を含む。

「美味い……」

思わずその味に驚きを隠せず呟いてしまった、渋味が少なくすつきりとした茶葉の味。さつきまで興奮してた体が落ち着いてゆく感じからしてダージリンなのだろう。飲んだことのある茶葉でも淹れ方次第でここまで変わる事に衝撃を覚えた。次に次にと飲んでいきカップが空になった。そんな俺の反応に満足したのかクラウディオは付け合せの焼き菓子をテーブルに乗せ次の茶葉を準備する。ガツガツと寝ていた細胞が起き始めたのか栄養を欲した体が次々と菓手に手が伸びる。

最後の一枚を咀嚼し、何度目かクラウディオが淹れてくれた紅茶で菓子を胃に流し込んだ。改めて腹も膨れ落ち着いた俺は恐らく答えを知っているだろうクラウディオに体を向け尋ねた。

「さて、クラウディオ。ここまでしてくれた貴方にこんな聞き方をするのは不躰ではあるが、こちらも聞かずに居られない状況であるのはわかりますね」

「はい、真つ先に尋ねてくるだろうと思っております。その為の返答は用意してあります。」

「では、聞きます。何故、九鬼が俺をここに運んだのか、説明して下さいのですよね？」

「ええ、実に簡単なことで御座いますよ」

老紳士はこちららを安心させるように微笑み穏やかな口調で話す。だが、彼が語る言葉は俺の今までを、これまで信じていた生き方を根本から変えるものだった。

「何せあなたはここ、『九鬼家』の血を引く人間であらせますから」

第七話

「あなたはここ、『九鬼家』の血を引く人間であらせませすから」

老執事から淡々と言われた事実。それは含みもないただの現実を言い放つたに過ぎなかつた。故に、シルバークロスは言葉の意味に理解するまで数秒間時間を要した。

「——っ、九鬼の、人間？ 一体、俺の何処が九鬼の人間である証拠があるのですか？」

目の前にいる人間がどんな人物であるかを頭から抜けるほど今のシルバークロスは焦っていた。絞り出した声も自身では何とか問い質せた物ではあるが傍から聞けば上ずり震えていた。そんな不安定なシルバークロスをクラウディオは安心させるようになるべく穏やかに語る。

「それをお話するにはまず、10年前の出来事をお教えしましょう」語り始めるクラウディオの顔は少し遠くを見るような表情だった。

10年前は九鬼の名が広がりはじめ勢いに乗る時期だったらしい。その時既に才能を開花させていた九鬼帝を筆頭に、九鬼は様々な分野に着手し勢力を拡げていった。そんな帝には3人の子供がいた。長女の九鬼揚羽、長男の九鬼英雄、そして英雄の双子の弟である次男の九鬼傑將。順調に育った3人はそれぞれが秘めた天賦の片鱗を見せ始め一部では九鬼家の黄金世代などと言われていた。だが、アメリカで開かれるパーティーに代理で出席した英雄様と傑將様はそこでテロに遭い英雄は肘を故障し重症、傑將は行方不明となった。

「私の教え子も護衛に付いていたのですが、爆発の際巻き込まれ戻って来ることはありませんでした。我々は行方不明となった傑將様の搜索に5年間、総力を上げ調べあげましたが手掛かりが見つかること無く搜索は打ち切られました。英雄様の表情は数年間浮かばれず揚羽様は弟妹に気を遣う様になり、帝様と局様は仕事にのめり込むようになりました。後から生まれ九鬼に入った紋様も傷痕残す皆様のお心を救おうと気丈に振舞おうとしていました」

それから5年の歳月が過ぎそれぞれの踏ん切りをつけ生活してる

所にシルバークロスが現れた。

「マルギツテ様と決闘し敗れ意識を失った貴方は、約定通り貴方の身柄を彼女が預かる予定でしたが、その時この従者が貴方の素顔を見て急遽ここにお連れしたのです。念の為に我々九鬼の方で遺伝子サンプルを回収させて頂き検査しました。鑑定の結果、貴方が行方不明だった傑將様である事が証明されたのです」

「……………」

「いきなりこの様な話をして戸惑うのは無理もありません、時間をかけてゆつくりと整理されると良いでしょう。しばらくしたら英雄様が見られます。おそらくこちらに赴かれますのであまりこちら動かないで下さい。トイレはここから出た左の道にありますのでくれぐれも出歩く事の無いようお願い致します」

それからしばらく石像の様に動かず乱れた思考と過去に思いを馳せた。これまで機械的、逃避的に己を見てきた。身内と呼べる存在を一切持つことなく、生きる為に備えた腕と知識で色んなものを勝ち取った結果、『アーバレスト』という居場所を作れた。しかし、その全てが無くなり突然九鬼の人間と知らされた今、自分という存在が曖昧になる。親がいた、姉兄妹がいた、家族がいた。だが、実感が湧かない。まるで他人事のようにしか感じなかった。

それからしばらく空虚を見つめ思考の海に浸る中、廊下を一定のリズムで鳴らす音が聞こえた。それは段々と近付き部屋の前で止まると一秒も待たぬ内に勢いよくドアが開かれた。

「傑將!!」

やや焦りを含んだ表情の男がいた。自分よりやや高い背丈に鍛えられてる身体は過ぎない程度に保っていた。そして、何より自分と同じ色の髪と十字傷が何より目に入った。男は自分の姿を見るや近付くと突然抱き締められた。

「うえ、ちょっと」

あまりの行動に咄嗟に拒否する事が出来ず首に手を回される。男に抱擁される事実に過去イギリスで味わったトラウマを想起し鳥肌が走った。節々が痛むのを覚悟して強引に引き剥がそうとするが男

の体が僅かに震えてるのに気付いた。更に男から小さい嗚咽が耳に届いた。

「すま…、…まぬ」

懺悔の様な呟きは一言一言漏らすごとに彼の心を締めてる気がした。こんな時、一体どうすればよいのかわからなかったがぎこちない手つきで背中を撫でた。何故こうしたかはわからない、でも、自然とこうすればいいと思い行った結果少しだけ男の力が弱まるのを感じるとそのままなるべく優しい手つきで撫で続けた。

その光景を後ろで見ていた序列第1位はシルバークロスの行動を大変羨ましそうに且つ永久保存する為に動画を撮っていた。

第八話

いきなり男泣きする訪問者、九鬼財閥の御曹司「九鬼 英雄」を10分くらい肩で受け止めると、表情は切り替わり豪快に笑う。

「ハハハ、いやすまん。つい再会するのが嬉し過ぎて感無量となっていました」

「生き別れた弟様を想い感激するそのお姿。あずみ、ますますのご尊敬止まりませぬ!!」

彼らが部屋を訪れて20分くらい経ったが、正直言つて疲れてしまいがちそうだった。寝起きでやや動き辛さを感じる体に腹が膨れたことで瞼に重みがかかり今すぐにも寝落ちしそうな状態で意識も絶え、何より当たり障り無い世間話を続け未だ本題の見えない男の思惑に正直苛立つて来ていた。

「……英雄さんはどうしてこちらに？」

違和感ある彼の態度にタイミングを凶り話を切った。普段ならばもう少し相手の話に合わせてそれとなく本題に向けさせるのだが自然と本音が簡単に出てしまった。それほどまでに俺はこの男の態度に無意識ながらも苛ついていたようだ。

「……うむ。そうであるな」

突然英雄の話の話を切られ、後ろに控えるあずみも一瞬眉を顰めさせるが英雄本人はそんな事も気にもせず先程のテンションとは逆転し神妙な表情をする。

「傑將……いや、シルバークロスよ。一つ問いたい、我のことを覚えていないか？」

真剣な表情で問いかけた質問。さっきまで親しみある言い方とは違う、どこか確かめる様で焦るような感じに思えた。英雄の目はどこまでも真剣で真つ直ぐ自分の答えを待っていた。だからこそ、自分も正直に答えた。

「……俺は今まで生きてきた中で貴方に会ったことは無い。今日が初対面だ、アメリカの路地裏生活からイギリスでの仕事でも九鬼みたいなでかい組織に関わったことも無いしな」

「……そうか」

落胆というより、寂寥する彼の表情はその日一番に印象が残った。英雄の落ちる肩をあずみは手を伸ばしかけた。

「……うむ、ならば仕方ない。過ぎたことは悔やんでも前へ進まなんだ」

すると英雄は立ち上がり時間を確認する。

「少し時間を取らせてしまったな、まだ傷も完治していないであろうから休むと良い」

そう言つて扉をくぐる時の英雄の顔は寂しそうに見えた。

※ ※ ※

閑散とする廊下の真ん中を歩く英雄とあずみ。あずみからは英雄の顔は見えなかったが、その背中からは哀愁のような感情が読み取れた。

「あの、英雄様……」

「あずみ」

あずみの声を遮ると共に足を止めた英雄は振り返ることなく、そのまま問いかけた。

「あやつは、あの男は、本当に傑将なのか」

部屋に入った途端見せたあの表情と壁の感じる話し方から英雄は己の中にある九鬼傑将という人物像が消えかけた。姉と似通った容姿、目の下にあつた泣き黒子はどこから見ても記憶にいる傑将と否定出来なかった。

「……間違いありません、あの方は英雄様の実弟である傑将様です。血液型も一致しておりますしDNA鑑定も同じ結果でした。彼が気絶してる時に身体検査を行った所、体の各所と側頭部に古傷が確認されました」

「記憶がないのはやはり、あの事件がきっかけか」

「そのように推測されます。あの後拘束した『アーバレスト』の者に聞いたところ、出自に関する情報は挙がりませんでした。が何度かフラッシュバックのような現象があつたと聞き出せました」

「……そうか」

それだけを眩くと英雄は再び歩き出す。その歩み方はどこか軽く
なつたようにあずみは感じた。

第九話

九鬼財閥の御曹司と話し込んだり、その後嵐のように現れた財閥の当主である九鬼帝と色々飛んだ話したり血の繋がりを証明されてから約一ヶ月が過ぎた。正直、九鬼帝との会話が一番頭から離れられなかったのは言うまでもない。

あれから目が回るような忙しさに追われ俺は周りから付けられたコードじゃない、本物の名前で呼ばれるようになった。「九鬼傑將^{くきまさかつ}」。正直、他人の名前にしか感じない名前^{それ}を俺はまだ受け入れ難かった。共に過ごした記憶のない他人に馴れ馴れしく飯だの鍛錬だのと連れ回されれば戸惑わぬ訳がなかった。しかし、そんな生活が続いたお陰か、または元から備わっていた日本人の血からなのか、予想してたよりも俺はこの地に馴染んだ。

語学関係はことわざやら例えやらまだ理解出来てない部分が多いが、意思疎通に影響のない程度には話せるようになった。元から仕事に不都合ないよう事前学習していたのが功を呼んだのも一因だ。

「そういえば、再来週から学校か」

日本に来てから一ヶ月経つ。今の生活に多少は慣れ一般教養を身につけた途端、突然九鬼帝から学校通いを言い渡された。一体何の意図があるのか問い詰めようとした所、既に主犯である帝の姿はなくアフリカへ飛んだ行ったあとであった。後で聞いたのであろう英雄もこの通達には大変喜んでいた。その英雄の喜びとは逆に俺の気分は大部気落ちしていた。

今まで自由に飲み食い歩き仕事をしていたが、それが知識と規範を得るためだけに奪われると思うとため息が零れた。

「どうされましたか傑將様。何か不安な事でも?」

「……たつた今音もなく現れた執事に対する疑問は生まれましたけど、まあ、二週間後の事です」

「二週間後……。確か、傑將様の晴れ舞台である東西交流戦は学年単位で行われる擬似的な合戦でしたね」

「そう、川神学園の転入条件に別の試験が……ん?」

そこで傑将は重要な発言があつたことを聞き逃さなかつた。

「待て、合戦？」

「はい、西にある川神学園と同じ制度を導入した学園『天神館』が川神学園に決闘を申し込んだ様です」

「クラウディオ、それはいつ決まった話だ？」

「つい一時間前ですね」

何ということだろうか、まさかこちらの転校するタイミングにそんなイベントが鉢合わせようとは思わなかつた。しかし、クラウディオの話によると俺の試験はそれに含まれる様だ。

「クラウディオ、一つ聞きたいのだが……」

「試験内容に関わつたのはヒュームと帝様です」

「ありがとう、とてもわかりやすかつたよ」
とうとう、あの雷帝殿は手段を選ばなくなつてきた。初めて顔を合わせた時はどこか距離感と云うか壁を感じていたが、猟犬に敗れた事実を知るや否や鍛錬の相手に組み込まれたのだ。そこから遠慮などというものは俺から消え失せた。

「あの二人は揃いも揃つて……」

頭を抱えたくなくなる気持ちを抑え合戦の事について思考を始めた。二人のことだ、生半可な結果で合格するようにはしていないだろう。ならば、今出来ることを成す為に現在時刻から会話可能な人物達に連絡を入れた。その姿をひっそりと眺める老執事の顔はとても穏やかだつた。

第十話

九鬼極東本部がある大扇島には幾つもの店が構えられてるが、その中でも密かに人気な店があった。自然と耳に溶けるような音楽が巡り店のクラシックな雰囲気や心の期待を高めてくれる。品揃えも良く、腕の良さも人気の一つだが中々目にするのもない逸品も置かれるので著名人達も気に入る場所であった。

だが、その日は特に客足が遠かつた訳ではなかったが店を訪れる人は誰であつても長居することなく早々と立ち去るのだった。今店内に残つて居る客はカウンターに座る人物ただ一人だけであつた。

「……。」カラント

「……。」キュツキユ

カウンターで一人静かに飲む金髪の老獺、九鬼財閥従者部隊永久序列である序列0位「ヒューム・ヘルシング」であつた。そんな老獺と向き合う形でグラスを磨く眼帯の店長「魚沼」は異質な気配に当てられ続けたのか心の中でため息を零す。

「……ヒュームさん」

客足が遠のき向かい合うこと数十分、グラスを5つ丁寧に磨いたあたりで魚沼は目の前の客に話を振つた。普段の彼ならば仕事中心にそういった私語など挟むことないのだが閑散とした店内で他の客も居らず聞かれることもない為、店主とお客ではなく1個人同士として魚沼はヒュームに尋ねた。

「何か嬉しいことあつたかわかりませんが、あまりはしやぎ過ぎじゃないですか?」

「何だ、俺はただ飲んでるだけだぞ」

普段から厳つく眉間に皺が寄る形相が更に深まる。誰がどう見ても通報案件であるその表情に魚沼はただ肩を竦ませるだけだった。

魚沼から見れば彼の凄んだ顔は見慣れたものだ。店を構えて何年か営業する魚沼だが、カウンターにいる人物は近くに構える九鬼財閥から通う常連であり古株なのだ。そんな人物のちよつとやそつとな威圧など魚沼は慣れてしまった。

「あまり飲み過ぎると明日に響きますよ。それにしてもここ最近よく来るようになりましたよね」

「偶々気が向いたただけだ」

「そうですか」

そう区切ると再び店内に心地よいクラシックと氷が溶け硝子に当たる音だけが店内に響いた。すると扉に付いてるベルがカラコロとなり来客を知らせる。

「やはり、ここに居ましたか」

ヒュームはその声に反応し振り返るとそこにいたのは背筋を真っ直ぐに伸ばし綺麗に佇む老人がいた。

「クラウディオか、何かあったのか」

意識が素早く切り替わり先程まで揺れていた感覚が抑えられていく。彼は何時如何なる時も仕事を全うし完璧にこなす従者である。しかし、クラウディオは首を振りヒュームの隣へ座る。

「貴方が最近、正確に言えば週に2度はこちらに居ると聞きまして来たわけですよ」

「……別に、飲みたくなっただけだ」

座り直すとヒュームはグラスに残ってたウイスキーを呷る。そんな長い付き合いの同期を見るクラウディオ。お互いの事をよく知る2人であるから言葉にせずとも理由を察せれた。

『九鬼 傑将』、彼の帰還は九鬼家だけではなく昔から仕える従者にも少なからず影響を与えていた。

「それほどまでに嬉しかったのですか」

「何のことだ?」

「とぼけても無駄ですよ。彼が来て以来、貴方の様子が変わってるのは皆わかっていますから」

「……ふん」

カランと一際大きな音をたて飲み干すヒューム、その表情は少しばかり陰りがあった。

「……10年前、あの頃は勢いに乗っていた事もあり成長する九鬼に体制が追いつかず穴が増すばかりだった。おまけに九鬼は色んな

場所から目の敵にされ、俺も迂闊に持ち場を離れる訳にはいかなかった。だが、俺のその考えが奴等の誘導でもあり、隙を作る切っ掛けになつてしまった」

低いトーンで語られる過去、ヒュームは当時のことを脳裏に想起させ思い馳せた。

「仕方ありませんよ、当時は今ほど人材が豊富ではなかったのです。無い物ねだりは常にあること、貴方の行いは今からして見ても正しいかつたのです」

「だが、その結果があゝの家族に亀裂を走らせた」

ヒュームは目を瞑る。それは、何度も目に焼き付き耐え忍んだ光景だった。

『そろそろ休め、それでは商談前に倒れるぞ』

『んああ、わかつてるさ。だけどよ、あとちよつとまとめたんだよ。この先俺の子供達もここで仕事するだろうからさ、早くいい場所にしてやりてえんだ』

『帝様……』

そうやって少し痩せた顔で笑う男とその傍らで哀しげに俯く女の姿。

『今日はここまでだ。拳も傷むだろう、鍛える前に壊れては元も子もない』

『ですが、我はもつと強くなりたいのです。家族を力から守れる程強く、ですから!!』

『……10分後に型の見直しをする。それを終わらせたらもう一度組手だ』

『はい!!』

血を見ても勇ましく力を付けた少女の姿。

『紋様、今回の出来事は九鬼の内で収まりましたが、二度とこの様な事をないようにして頂きたい』

『う~~~~』

『ヒュームさん、これはあまりにも厳しいのでは、それに紋様だつてこのような事をしたには理由が……』

『黙れ』

『…………っ』

『……………か……ら』

『む？』

『父上……と母上、姉上と兄上に、われはただ……元気になつて、欲しくて』

『紋様……』

己を押し殺しながら気丈に振る舞い家族を想う儂き少女の姿。

「九鬼^家を守れても俺はあの家族を守れなかった。もう、長いこと仕えていながらもだ」

「……………」

「だから、少しでもいい。あの一族が元に戻る為に、痛ましい後ろ姿を晒すことないよう俺の出来る限りの全てで守り抜く。……それが、これまで何も出来なかった俺の唯一してやれる事だ」

再び注がれたグラスの中身を飲み干すと磨かれたテーブルに叩き付ける。その瞬間、叩き付けた手は微かに震えていた。

第十一話

川神学園。武道を志す者や人脈の拡大を目的とする者が集まる学舎。この学園ならではのシステムが存在し、敢えて格差を作り切磋琢磨とお互いの競い合いを推奨する学校である。そのとある一室で厳格な雰囲気漂わせる一人の老獺が一枚の書類に視線を落としていた。読み進めること数分、書類の内容読み終わると老獺はゆっくりと息を吐く。

「どうかなされましたか、総代？」

老獺が息を吐くタイミングで丁度入室してきた緑のジャージ姿の中国人「ルー・イー」が老獺の様子の変化に声を掛ける。

「何、そこまでの話じゃあ……いや、これはこれで問題かもしれんな」

あまり見ない老獺の含んだ言葉にルーは警戒した。彼の目の前にいる老獺こそ武の頂きとして名を馳せ、世界に影響を及ぼす程の人物である「川神鉄心」である。そんな人物が一枚の紙に書かれているプロフィールに唸る姿など滅多に見られない。ルーは鉄心が眺める紙を横から覗き読み進めた。

「九鬼、傑將……年は今年で17歳で九鬼家本部に在住となると英雄くんの親戚でしょうか。この子のどこが問題なのです？」

何気ないルーからの指摘に鉄心は少しの間を置き言葉の訂正した。

「……弟じゃよ。幼い頃事故で行方不明だったらしいが、最近見つかったそうじゃ」

「なんと……」

驚愕するルーの反応を他所に鉄心は引き出しから数枚の書類取り出す。それは川神学園へ途中編入する為に行われた筆記試験結果であった。ルーはそれを受け取ると傑將が解いた試験内容を読み流す。次第にルーは傑將という人物像を頭の中で構築しながら理解する。

「……編入試験は申し分なし。海外に居たのでしようか、日本の歴史や国語は怪しそうです。その分理数系の点数は高い成果を出します。性格判定も特に問題らしい部分は見当たりませんネ」

素直に思ったことを口にしたルーであるが反対に鉄心の表情は重かった。それは彼を編入するきっかけとなる二人の人物だ。現在九鬼財閥を文字通り引つ張ってる当主の「九鬼 帝」、九鬼家に仕え戦闘でも業務でもあらゆる場面で活躍される特殊な従者、通称：従者部隊といわれる1000人で構成された部隊。その中で永久欠番とされる序列第0位に位置する鉄心の元ライバルであった九鬼家を影で支える絶対的存在「ヒューム・ヘルシング」である。以前、鉄心は滅多な事では会うことのない帝とヒュームの2人から傑將の編入を直々に打診されたのだ。

最初は鉄心も疑問を抱いたが編入を持ちかけた2人の何とも言えぬ雰囲気当てられ承諾した。昔から面識かる鉄心からしても2人の姿は初めて見たものだった。

「……………」

「総代？」

「おお、すまんおう。して、何の話じゃったか？」

「しっかりとしてください、彼の編入日が未だ決定されてないのは何故なのでしょう？」

ルーが一通り書類に目を通した上で最も疑問に思う点、それは彼が手にしている紙に書かれてる成績は既に結界が出て終わってる物なのだ。にも関わらずこの数日間誰一人として編入されていなかった。すると鉄心もルーと同じ困った表情を浮かべた。

「実は、彼の編入試験にもう1項目追加するよう九鬼の連中に頼まれてのう。3日後に行われる『川上大戦』をその試験に組み込みたいようじゃ」

「それは大丈夫なのですか、今回こちらに大戦を挑んできたのは西の名門『天神館』ですよ」

『天神館』……武の頂きと言われる川神鉄心の一番弟子である「鍋島正」が校長を務める名門校である。川神学園のシステムを導入しており、こちらでもお互いの競い合いが推奨され高い成績を叩き出している。

「ある程度条件は下げるつもりじゃが、最低でもここの入門生くら

いはクリアして貰う」

鉄心とルーの2人が普段構えてるのは武の総本山とも言える「川神院」である。世界レベルに厳しいとされるこの狭い門は多くの希望者を弾き一握りだけ生き残った。護身用に学ぶコースもあるが正式な川神院に潜るとなると最低限の基礎と才能、精神が求められる。

そんなレベルの試験を鉄心は傑將に要求するつもりだろうか。

「……ですが総代、いくら入門生レベルでも毎年100人以上は脱落します。彼にそれほどの実力があるのですか？」

ルーの指摘に鉄心は普通に答えた。

「彼のことは一度視たが、まあ大丈夫じゃろ」

「そんな無責任な……」

若干の呆れるルーだがその心には確信が持てた、何故ならあの武の頂きと呼ばれる川神鉄心が『視た』上でそう判断したのだ。ルーから見ても鉄心の見抜く力は相当な実力を持つものでなければ隠す事など出来ないのだから。

「ま、彼女達もこの日に来るのじゃからそこまで考えんでもええじゃろ」

「彼女達と言うと九鬼の子達ですネ」

「紹介も彼らと一緒にすれば馴染みも早くなるじゃろうしの」

ちらりと鉄心は部屋の中にある重厚な金庫に目を向けた。その中には重要書類と機密とされる物が色々と入っており、これから来る九鬼の子達のプロフィールもそこに含まれていた。

(さて、今年は忙しくなりそうじゃ)

これから訪れる目まぐるしい未来を幻視しながら鉄心は子供たちの成長に期待と不安を膨らませた。

第十二話

神奈川のとある夜の工場地帯。九鬼が保有し提供するその工場地帯から夏の訪れを感じさせる初夏以上の熱気が渦巻いていた。雄叫び、怒号、鼓舞と様々な声が星見えぬ夜に吸い込まれる。

東西交流戦

そう名付けられた今回の学校対抗試合は3学年全員が参加する大きなイベントだった。

初日は直接高台から1年生の試合を見たが、これは顔を覆いたくなるような敗北だった。敗北理由は至って単純。戦いが始まってしばらく膠着状態が暫く続き痺れを切らした大将が前線へ、それを見た敵はこぞつて袋に叩いたのだ。何とも情けない終わりだろうか、しかし、僅かにだが勝利の可能性はあったのだ。噂では日本でも指折りな剣士の娘が在学してるらしい。開戦から暫くしてその姿を見ることが叶うと同時に確かな実力は持つていると見て思った。武術について傑將は詳しくない。だが、遠目でもその動きが普通とは違うという事実は傑將でも理解出来た。姿の見えない相手を感じする感覚の鋭さ、重力に逆らうような軽い身のこなし、何より敵陣地に辿り着いた直後の刀を抜こうとした姿は背中に冷たい物が走った。傑將がまだ仕事をしていた頃以身についた危機的直感、本能が生存する為に訴える回避行動を齡15歳の少女から感じたのだ。

「あの歳でそこまでいきますか……」

改めて自分が行こうとしている場所の異常性を肌で感じた。それは翌日になっても思い知らされた。この日は九鬼の開発部に頼んでいた物の最終調整に足を運んでいた為見に行くことが出来なかった。代わりに李さんに録画を頼んだ映像で見たが、結果的に言えば3年生達が圧勝した。まるで映画のワンシーンとしか言いようが無かった。そこに映しだされていたのは例の武神が一齐に、それも一つの群れから個となった相手3年生を一撃で崩していた映像だった。俺も最初から人から外れた存在と聞いていなければ信じずCG映像とと思っていただろう。

「やはり、川神学園ここは化け物の巣窟ですね」

思わずそう呟き放心になりながらも最終日の2年対抗戦を迎えるのだった。

「……。」

今も下で熱気渦巻く彼らを眼下に据え戦況を傑將は眺めていた。格好は普段着るカジユアルな私服ではなく川神学園の制服を着ている。するとズボンのポケットが震える。取り出すとスマホの画面には「九鬼 英雄」と映っていた。

「英雄、何かあったのですか？」ピツ

「今どこにいるのだ傑將。今、お前の事を皆に伝えたかったのだが」
「遠慮しときます。このタイミングで俺のこと紹介するのは周りに警戒と余計な考えを生んでしまうので別の機会にお願いします」

いきなり見ず知らずの人物を引き入れ余計な考えを持たせるより影から動きやすいように支援なり参加なりした方があまり波を生まないだろう。聞くところによれば川神学園はマンモス校、つまり大まかな人数の把握は出来ても顔までは覚えていないだろう。いざ知らない人物が堂々と手伝ってくれば勝手に味方と判断するだろうし誤解も生まれない。しかし、英雄はそんな回りくどい事や作戦よりもただ純粹に紹介したいのだと電話越しにも気持ち伝わった。

「むっ、そうか。……我の弟を今集まる皆に是非とも紹介したかったのだがな」

明らかに落胆する英雄に傑將は肩を落としながらフォローに回る。

「学園から合格貰ったらまた一緒にになりますから、その時に紹介なり色々任せます」

「うむ、ならばこの戦是が非でも勝たねばなるまいなあ、フハハハ俄然と我もやる気が満ちて来たぞ!!」

時間が経つと遠くから熱気の籠った雄叫びと爆音が工場地帯に反響する。恐らく戦いが始まったのだろう。燃え盛るように気力を漲らせ振り撒く両者はお互い一步も譲ることなく矛を交え雌雄を決しようとしていた。だが旗色が悪い、それも原因は西方十勇士と土地柄、川神側の落ち度だろう。十勇士は言わずも一騎当千の実力があつ

た、他には慣れない土地ということもあり慎重だ。そんな土地の有利性を理解せず驕り挑んだ結果がこの劣勢に繋がっていた。

だが、逆転の手はある。天神館側の士気の高い元は彼ら十勇士である、彼らを崩せば自ずと士気は弱まり逆襲することも可能であった。傑將はしばらく勝利する方法を模索し眺めてると自分の横ギリギリを何かが掠めた。すぐに身を低くし自分を掠めた道具を見るもそれは矢であった。この距離では正確に把握できないが絶え間なく放たれる所からして5から10人程はいるだろう。しかもその中で一際面倒な存在がいるようだ。

「こんな所に伏兵が居るとは思わなかったけど、この美の化身である毛利の三本矢で仕留めてやろう!!」

何やら派手に喋りながらも雨のような矢が降り注いだ。数ある矢の中で特に際どい3本が恐らく奴のだろう、高台である事が裏目に現れた。顔を出す度に正確な弓に惑わされ迂闊に出ることが出来ず舌打ちする。

傑將が今回出された追加の課題は『一定数の天神館の生徒及び西方十勇士の一人以上の撃破』だった。正直甘く見られがちな内容だが、相手は学生とは言え天神館に身を置くものはそれぞれ一芸に秀でており、様々な分野で好成績を叩き出している。特に今年の2年生は優秀な人間が集中し、黄金の世代やら奇跡の世代やると言われているらしく、その中で特に文武に優れた十人は「西方十勇士」と称されているそうだ。実力も並の学生など比べるもなく中には武術家を圧倒する者もいるようだ。そんな相手を他に盗られることなく周りを把握しつつ時間内に解決しなければならぬ。

「単独って所が痛いな」

傑將の主な戦闘スタイルは奇襲からの連携なのだ。正面からの戦闘や単独での敢行など傑將からすれば避ける選択肢だった。しかし、此度の状況からそうも言ってられなくなった。

「まあ、何もしてない訳じゃないんだが」

今ある傑將の武器は手持ちの武装と情報である。今回のために傑將は覚えてる限りの知り合いから情報をかき集め手の内を読んだ。

そして、残りの時間で対策を練り行動を予測しながら実践に移す予定であったが目の前の人物は自分の予想を裏切った。

「毛利元親」、天下五弓に数えられる人物。自己愛が激しく美意識が過剰な為他者からは理解されにくい。だが、五弓に名を連ねる実力は持ち合わせており、多彩な技は相手を翻弄する。頭も冴える様で立ち回りを考えた動きが実際に早かった。

「でも、手がない訳ではない」

傑將はポケットに入っていたスマホを取り出し素早く操作する、するとこの場一帯から音が鳴り響いた。

「何だ!？」

「敵か、音が至る所から聞こえて場所が」

けたましい音がその場にいる者を縛り付け隙が生まれる。その間に傑將は素早く駆け下り離脱を図る。しかし、天下五弓の目からは逃れることは出来なかった。

「こんな子供騙しに引っ掛かるものか」

番える矢は傑將をブレることなく捉え急所を穿とうとするがそれも傑將の想定内だった。

「っ!?! 何だ、光がっ」

それは突然、元親達の目の前で起こった。強烈な発光、視界全てを白く染め上げるほどの光が彼らを襲う。傑將が投げたのはこの工場地帯にあった物から即席で作った簡易な閃光手榴弾、スマホで鳴らした後光る時間と位置を計算しながら思いつきり上に向けて投げたのだ。簡易的な物である故に光る時間は短く視界を奪う時間も短いのであまり使う場も限られるが、逃げる時間は稼ぐことは出来た。

「くっ、こんなもので…ん?」

視界が戻った元親が最初に目にしたのはこちらに向かう爆薬搭載の矢だった。

「なっ!?!」

元親はそのまま為す術もなく炸裂された爆発を食らう、その間に彼は彼方の高台にいる藍色の髪をした少女を尻目に理解した。

「ま、さか、天下、弓の」

「椎名流弓術『爆矢』油断すると一気にやられちゃうからね」

遠方から狙撃した少女「椎名 京」は元親が完全に戦闘不能であることを確認するとメールで本部に状況送信、すぐに返って来た指令に従い行動する。

「……………」

移動する直前京はある場所をちらりと見た、そこは先程自分達と同じ制服を着た見慣れた色の見慣れない髪型の学生が逃げた方向だが、あんまり他人に興味ない京は直ぐに興味を失い次の場所へ駆けた。

第十三話

それは偶然に近いものだった、先程の襲撃を何とか脱した俺は別の場所で待機した。すると予め工場地帯に施した幾つもの警報に敵が引っかかったのだ。敵は川神側陣営上空からの奇襲を仕掛けるようだ。傑將の位置は陣営からそう遠くない高台に居る。梯子を降って迎撃するには間に合わないだろうし九鬼にいる序列上位達みたいな大ジャンプなど到底出来るはずもなかった。

「仕方ない…」

正直、気乗りもせず少し恐怖で首あたりが粟立つが傑將は高さが一番近い台に向かって飛び出した。

※※※

川神市九鬼所有工場地帯・上空

「さて、そろそろ本陣の守りが移り手薄なる頃か…」

そう呟くのは全身を黒の忍装束で夜の景色に溶け込んでる天神館の生徒「鉢屋壱助」だった。彼は大人一人分乗れるであろう黒塗りされた大凧で制空権を手にし戦況の監視、天神館へと伝えていた。

そして、時経つにつれ押し込んでいる戦況に終止符を打つ為に獲物に手を伸ばす。彼が居るのは川神本陣の上空、目指す獲物は川神総大将「九鬼英雄」であった。

(守りは居れど、手練は出払ってる様だ…ならば、今こそ好機!!)

獲物目掛け目を細める鉢屋、その目からは執念にも似た何が宿っていた。

鉢屋壱助の家は代々戦国の時代でも暗躍した鉢屋衆の一派で今も内閣調査室処理課で影の活躍をしている。壱助も忍びとしての技術を学び秘められた才能を開花させる。その後も多種多様な依頼を熟し、技術を磨く。そんな時に、鍋島からスカウトされ今に至る。

だが、壱助は川神に対してそれほど思う所は無くむしろ無関心であった。しかし、壱助がいつも覗いてるサイトから珍しく猥談以外の話題、本日の東西交流戦の事が上がりその中とある一言が多くのを刺激し彼が動くきっかけとなった。

『何だかんだで、西って東よりよえーじゃんww』

何も知らずぬるま湯に浸かった弱者の戯言だがその一文が火種となりいつの間にか収まらぬ所まで炎上、醜い争いへと変わっていった。サイトのコメントが罵倒で苛烈極める中、サイト主がとある機転を利かしこの争いをやる気へと繋げたのだ。

それは……。

「(一番名を挙げた者に合わせ贈られるサイト主秘蔵セット1箱分……これを逃す手はない!!)」

大変く原初だらのない理由欲求だった。

何故、彼がこのような下らない理由に闘志を燃やすか、それは今でも内閣情報室処理課の仕事殆どを請け負っている彼の叔父であり、師の体験談が全ての原因である。

鉢屋壱助にとって叔父は心の底から尊敬する師であり目標であった。そんなある日、身体的基础が出来つつある鉢屋に叔父は次の段階の精神鍛錬として様々な体験談を語った。元々素直な性格である鉢屋はその話を聞き思考を偏らせたのだった。

そこから彼の生活は変わった。女性とは肌で触れることがなくなり、密かに人気だった容姿もパーカーなどで隠す様になった。勇気を振り絞った女子からの告白や贈り物などにも丁重に断り忍者としての修行に打ち込んだのである。だが、生活が変わっても中身は思春期真っ盛りの健全な学生である。憧れを抱いたり鍛錬に励み共に暮らす異性を頭の隅で意識する思春期の少年に鋼の精神はまだ柔かった。

そこで彼は気付いた。何も己が堅物的な思考までして我慢するのではなく、己で己を鎮めれば良いという至り方だった。健全な男子であれば誰もその本能から刺激される劣情を抑えることは出来ない。故に、鉢屋は内に潜む煩惱を己で吐き捨て心身共に賢者の如く一ミリも隙間ない精神を心掛ける様になった。

「(他十勇士に人員を送り守りが薄まったこのタイミングでなければ後に響くだろう、故に今ここで討ち取らせて貰う)」

大凧から鉢屋は身を投げ落下する。手には使い慣れた苦無を握りしめ、確実に仕留め意識を奪うイメージを固め実行する。目下にいる

英雄は勿論、周りで忙しなく動き回る生徒達も気付く様子が無かった。

「川神総大将、その首貰い受ける」

あと十数秒で届く距離であった。しかし、鉢屋が次にとった行動は相手を昏倒させる事ではなく彼の経験から導き出された不意打ちからの守りと受け身だった。

ガキイイツ

苦無から伝わる勢いと力、それは予想外な所から放たれていた。

「なっ、上からだと!?!」

「英雄の首は早々とらせませんよ」

突然現れた男は左手に纏わりついてるいチェーンの様なアクセサリを鉢屋に向け放つ。迫るチェーンに鉢屋は舌打ちし苦無で防ぎながら巧みに体を捻り軌道を逸らした。勢いを殺しながら地に転がる鉢屋に対し男はもう片方の手に纏わりついてるチェーンで滑りながら危なげもなく着地した。直後男の横に黒く塗られた大風が音を立て落ちてきた。

「なるほど、拙僧の風を利用したか」

「頑丈な糸で助かりましたよ。切れてたらそのまま落下してましたから」

男は鉢屋が使用していた風の高台に繋がっていた糸を滑り奇襲したようだ。

「なっ、なんだ」

「て、敵襲! 敵襲だ!!」

突然現れた侵入者に呆気をとられた親衛隊一同は鉢屋と男の着地してから動き出す。川神生徒が動き回る中、対峙する二人は周りなど気にすることなくお互いだけを見ていた。

「鉢屋壱助で、間違いなさそうですね」

「拙僧の名を既に知るとは、川神の方も中々やるようではあるな」

「ええ、貴方の情報得るのに知り合い8人に連絡取りましたよ、お陰で新しく10人ほど知り合いが増えましたかね」

突然現れた丁寧な口調で語る男、鉢屋は数度脱出の算段や奇襲を仕

掛けようと伺うが男の立ち位置、構え方、こちらのタイミングに合わせ動く手に行動が阻害されてしまっているのだ。

「お主、何者だ」

「そうですね、周りの味方への伝えも兼ねて自己紹介しておきましよう」

男は銀色の一度髪をかき揚げ、先程より大きく名を述べた。

「私は『九鬼傑將』。本日より川神学園に仮転入しました、以後宜しくお願いしますね」

「この日より『九鬼傑將』の名が世に伝わった。」

第十四話

やや湿気の残る夜、九鬼財閥が保持する工場地帯では学生達の生み出す熱気が最高潮に達しようとしていた。

その中で英雄の後ろで気配を消し控えるあずみは喉に引つかかる小骨の様な疑問を抱いていた。

(何故、英雄様は先程の襲撃を許したのか)

それは英雄目掛け鉢屋一助が接近してきた時だ、上空に僅かな違和感を感じたあずみは周囲の人間の気配と地下の振動、上空20mほどの辺りの変化に気を配った。あずみは鉢屋の襲撃に一早く気付き主である英雄に報告と護衛をしようとするが英雄はこちらを軽く見た後すぐに視線を元の位置に戻した、まるで全てを承知しその上で敢えて何もしないと。

すると甲高い金属の弾く音が鳴り響いた。護衛は勿論襲撃者も驚く中で英雄は笑みを深め堂々とその姿勢を崩すことは無かった。

(全てを知ってた？ 鉢屋の襲撃も、傑将様が割り込むことも？)

だとすればそれはもはや予知能力のような超能力としか言えないものであった。実際、英雄の中でもこれはらしくない賭けで内心冷や汗物だった。英雄はやや性格に傾きがちではあるが実力主義の川神学園の学年2位の頭脳を持っている。勿論慢心する心はあれど相手の過小評価と己に自惚れる事は無い。

だが、英雄は信じた。己の信ずる者が己の信じた結果を示し、応えてくれる事を。そして願いは通じ結果は示され英雄の心中は叫びたい程感極まっていた。

それとは別に得物構える傑将は目の前の敵に対する警戒の他に別の思考をしていた。

(さっきの襲撃、不思議と自分でもよく動けたと思う)

対策を立てたとはいえ25mからの飛び降り、対象を絞った襲撃、違いがあるとは言え技量が上の相手に対し1対1の対決。どれもこれも彼にとつてはらしくもないものだ。

(自分は日陰者だ。影からチクチクと襲撃や罠、誘導して相手を弱

らせる。時として自分も駒として誘いまたは撃退する)

しかし、日本に来てから傑將の思考や闘い方も変わった。

卑屈な態度で相手を煽り相手の乗りやすい話し方でペースなど掴んでは裏を探り本質を見定めていた。しかし、日本に来てはどうだろうか、隠し欺いていた感情が剥き出しになり吐く言葉に感情が籠る。終いには自ら前に出て立ち奮うなど…。

(随分とまあらしくなくなったものだ…。)

そう己を評価し細く微笑み嘲笑する。

「ふん。敵を前に笑うなど余裕であるな」

「いえ、貴方を侮辱した訳ではありませんよ。ただ、らしくない自分が可笑しくて……さて」

先程の意識から更に冷えて捉える視線に力が増した。息を吐くと身体の中の余計な熱が吐き出される幻覚を覚えた。腕や足がどこまでも機微に反応し、僅かに落とした腰は重心が安定し相手の動きにどこまでも対応できる姿勢となる。

小指から親指まで力が籠り僅かにたわんでたチェーンがピンと張る。腕の可動域を僅かに広げ攻防どちらにも対応できる形にもっていった。

飛び込む機会を伺っていた鉢屋だが傑將の雰囲気豹変したことでその余裕を捨てた。射抜く程の鋭い視線と隙の無い構え、慢心する心の一切を捨てた闘う者の姿。そんな傑將に鉢屋は背中に冷や汗が流れた。

(これは想像以上に厄介な手合いだ)

この時から既に鉢屋は迎撃の手段を捨て逃げの算段を巡らせていた。同時に傑將も相手の思考を先読みし退路を塞ぐ為の情報と策を巡らせる。

睨み合うこと僅か10秒と満たない時間、先に動いたのは鉢屋だった。

フェイントを含めた初動で向かう先には英雄がいる所だった。

「川神御大将の首、刺し違えてでも貫い受ける！」

懐から幾つもの火薬を握り鉢屋はそのまま英雄に向かい心中を計

る。

「させるか!!」

しかし、その前に気配を消していたあずみが躍り出る。小太刀を構え己を肉壁にしてでも英雄に被害が及ばない覚悟で鉢屋に相對する。

「貴様、風魔の者か!」

「そう言うお前も鉢屋だな。悪いがこの先には一步も通させねえぞ」

もうすぐにも激突する両者。あずみは相手との距離と己の持つ最大速の技が当たるだろうタイミングを読み構える。瞬間、あずみの足元から勢い強い煙幕が広がった。

「ちっ!」

これにはあずみも舌を打った。いくつか想定されていた結果ではあったがこうなるとあずみは英雄に付いて居なければならぬのだ。

(下手に動けば敵は英雄様を狙う。だが、英雄様に付いていれば敵は情報と己の生存を確保出来る)

(あの鉢屋の場合恐らく後者の選択をするだろう。いつもならステイシーや李に護衛を任せてあたい自ら討ち取りに行くんだが、これは学校イベント従者は居ない上に周りにいるのは腕がまあまあの学生のみ)

「仕方ねえか」

煙幕の中から素早く抜け出したあずみは構えを解かないままで英雄の元へ戻る。辺りの安全の確保が出来るまでそのまま警戒し煙を睨みつける。

すると煙の向こうから金属が擦れる金切り音が響いた。

煙が晴れると片膝を着いたり完全に倒れたりしてる生徒と、擦り傷だらけで鉢屋を捕縛した傑將の姿が現れた。

第十五話

鉢屋がフェイントを駆使し英雄の方へ駆けたあと傑將は周囲にいる者に対し指示を出した。

「今近くにいる人で徒手、または掴みに自信のある者は居るのであれば早急にお願ひしたいことがあります。今から指示する配置に並んでもらいたい」

突然現れ勝手に指揮する奴に何人かが反抗的な目で抗議した。そんな奴らに傑將は冷やかな視線を向ける。

「ただし、私の指示に気に食わないのなら結構。勝ちたくもなく、ただのごっこ遊びに飽きたのならこの場からの退場願います」

尚も食い下がる一人の生徒が一步踏み出そうとしたその瞬間にその足は止まった。

「もう一度言います。”C a s s e — t o i”」

その時その場にいた川神生徒の背に氷が流れたかのように悪寒が走った。それは間違いなく一人の人間から発せられ自分達を呑み込んだのだ。

自分の殺気に固まった学生を見たあと傑將は淡々と指示を飛ばし学生達はそれに従った。

(これで準備は整い後は迎えるだけだ)

懐から傑將は愛用の黒い革手袋を装着し本気の戦闘へ意識を切り替える。すると英雄の目の前で煙幕が広がり学生達も突然の事態に指示通り身構える。

煙が広がってから数秒、傑將の正面から黒い影が飛来してきた。傑將は突然飛んできた苦無を辛うじて避けては払い、苦無が飛んできた方向に鎖を放つ。限界まで放った鎖が何に当たることも無く伸びきると、右から悲鳴が上がった。

見れば煙を纏った鉢屋が川神生徒に襲いかかっていた。舌を打ちながら傑將は襲われている学生の元に駆け寄り鎖を振るう。

「くっ」

振るった鎖は狙い通り鉢屋の腕に絡まり鉢屋は内心で舌打ちをし

た。

一瞬の気が逸れたことで襲われた川神生徒はその場を離れ、傑將は接近する。

鎖を払った鉢屋は目の前に迫る傑將を捉えると後ろに跳び、先程使った煙玉の残りを叩き付ける。視界が煙で塞がる瞬間、鉢屋は懐の暗器を高速で投げる。放たれた暗記は全て煙の中に吸い込まれていった。

「……」

鉢屋は煙の向こうを見つめ次の暗器を準備する。しかし、煙の向こうから現れたのは鉢屋のよく見慣れた物だった。

苦無、棒手裏剣、鏢ひょうと先程己が放った暗器達が反射される様に返ってきたのだ。

「むっ!？」

まさか自分の武器が来るとは思わなかったがこの様な戦いも想定していたのか鉢屋は危なげもなく全てを払い落とし、強力な磁気を纏った鎖に拘束された。

「ぐあっ!」

手首から肩まで絡まれた上に強力な力で縛られ動けなくされた鉢屋。何度ももがき抵抗したが、腕に痺れる痛みが走り筋肉が弛緩する。

「これは、只の鎖ではないな」

「その通りです」

煙の中から現れた傑將は制服を肩にかけ擦り傷だらけの姿だった。「あまり暴れてもバッテリーの持つ間はこの拘束は解かれませんか」

鉢屋の前、一人一人分の距離を空けた状態で傑將は立ち止まり構える。油断した隙を伺うつもりだった鉢屋もこれでは不意打ちも畏も意味など無く完全な敗北を認めた。

「俺の負けだ」

「私の、勝ちですね」

川神本陣から本日2つ目の勝ち鬨が上がった。